

## まえがき

この調査の計画は1970年の春、関西大学探検部アマゾニア踏査委員会の発足よりはじまつた。私がこのアマゾナス踏査隊の相談相手になったのは1970年の春であったが、正式に隊長を引受けたのは翌71年に入つてからであった。そして翌71年3月に10日間、5人の隊員で韓国ソウル～ブサン間約400kmを各個人別コースをとり、単独徒步縦走を行なつた。また同年7月にはアマゾンに類似する高温多雨といふ気象条件の鹿児島県屋久島において、ハンモック生活等のトレーニングを試みた。さらに同年8月、琵琶湖の北端塩津から大津に至る約70kmをゴムボートにより縦断を試みた。これらと並行して隊員は毎日10kmの駆足、その他の身体の鍛錬と、現地アマゾンに関する資料蒐集、実態調査の研究、ブラジル語の學習と着実にその準備をすすめていったのであった。しかし準備の最後の段階において、ブラジル国政府からの査証不発行といふ思いがけぬ障害に遭遇した。

ブラジル国では周知のごとく強力を軍事政権による革命政府が1964年以来続いているが、この政府成立当時は大変なインフレであったが、1970年代にはいって漸く安定に向かい、各方面での政策が有効に実施されはじめた。ここでは全人口の9%、約80万人が純粋のインディオと推定されているが、その中約4万人がいまだ未開の段階にあるものと考えられ、これらに対する政府の態度は今日特に熱意がみられ、1956年ジェノバ(Genova)で開催された国際労働会議(International Labor Conference)の決議にもとづく土着部族の生活改善政策がカステロ・ブランコ大統領の政令107条によって推進されてきた。現在ブラジル国には14州にインディオ保護局があり、それらの下にポスト(Postos)と呼ばれる現地事務所が開設され、文明社会と接触の少ない集落に若干名の役人が家族と共に常駐している。1971年現在、その数は93カ所である。このようにブラジル国では1910年中央政府の下にインディオ保護局がロンドン将軍(Candido Mariano Da Silva Rondon)などの努力によって開設されて以来、その所属部局や名称は幾度か変わつたが、一貫してインディオの居住地へ学者の特別な調査などの場合以外、一般の人々の立入りを規制していく、まして面白半分インディオを見物に行く者はできるだけ入らせぬようにしてきた。このような事情のため、われわれの踏査隊も容易に入国が許可にならなかつた次第である。

一方、私は1971年9月より9カ月間、本務校である京都産業大学より海外研修のため合衆国カリフォルニア州立大学へ派遣されることになった。その後も在日本の踏査隊とは定期的に連絡をとり、翌72年3月、先発の松本隊員とブラジル国マナウスで落合うべく、単身リオ・デ・ジャネイロに向かつた。ここでリオの日本総領事館の石原書記官のお世話で、幸運にもグアナバラ州(Guanabara)のインディオ保護局長(Ministerio Do Interior Funda

gão Do Índio) のマリオ・ポンペウ・デ・カストロ・フェレラ氏 (Mário Pompeu De Castro Ferrera) に会うことができ、この局長の手配によってこの調査の現地での第一歩が踏み出されたのである。彼の紹介によってアマゾナス州のインディオ保護局の局長アントニオ・エステヴェス・コウティノ将軍 (General Antonio Esteves Coutinho) がその後の本踏査隊の活動を可能ならしめられたのである。本隊のチーフの松本はこれ以後翌年3月まで、6月に後続隊員としてやってきた藤本、津田の両名は翌年1月まで現地に滞在して、これらの調査を実施したのである。

われわれのヤノマム (Yanomamá) 族の調査は幾多のう余曲折の後ここに報告書を公にすることことができたことはよろこびにたえない。隊員諸君のねばりもさるものながら多数の方々のご協力、ご指導のたまものと深く感謝いたしております。ブラジル国に関する生の情報を提供していただきと共に、いろいろ励まして下さった関西大学の杉原弘人教授、田畠弘画伯、マナウス在住40年の本田光衛氏、またブラジル領事館、海外移住事業団、国立科学博物館、日本熱帯医学協会のお世話下さった方々、これらの皆さんに厚くお礼を申し上げます。

また関西大学当局 (特に学生部の方々)、探検部OB諸氏、現役の皆さんには物心共々に多大のご支援有難うございました。

最後になりましたが、現地マナウスの日本領事館の串田領事、大和田誠一郎氏に、日本入学生寮の皆さん、そしてマナウスのインディオ保護局のご協力下さった職員の方々、ニュー・ライブ・ミッションの宣教師の方々にも謝意を表する次第であります。

1974年3月31日

関西大学アマゾナス踏査隊

隊長 天鷹 良雄



なお、この「報告書」作成にあたっては、各項目を調査分担した隊員がそれぞれまとめ、共同討議の中で検討、修正を加え、最終的に隊員の見方を尊重し天鷹が監修した。